

心理学から見た想起と予期に関する考察
— 行為としての過去と未来 —

[論文概要書]

大橋 靖史



心理学から見た想起と予期に関する考察
－行為としての過去と未来－

[論文概要書]

大橋 靖史

本論文では、日常生活および心理学において自明なものとされてきた過去や未来といった時間について再考した。論文は大きく分けると、次の3つの部分からなる。

第1部では、過去の時間について考察した。考察の結果、心理学の実証研究においては原因と結果の因果関係として過去が主に扱われてきたことが明らかとなった。特に、心理学においては体験の正確な再現としての記憶という考えが広く流通していた。これに対し本研究では、現在における行為として過去を扱った研究についても言及した。特に、心理学的な過去の特質として、想起するという意識的な行為に注目した。

第2部では、未来の時間について考察した。考察の結果、未来の時間を扱った実証研究においても、原因と結果の因果関係から未来を捉えている場合が多いことが明らかとなった。そうした研究の中でも特に、未来の行為を正確に予測することを目指した研究について論じた。こうした研究の動向に対し本研究では、現在における行為として未来を扱った研究についても言及した。特に、心理学的な未来の特質として、予期という行為に注目した。

第3部では、心理学的な時間研究が抱えてきた2種類の対立、すなわち、過去時間と未来時間の対立、および、因果関係と現在の行為との対立を乗り越える可能性について検討した。前者の対立に対しては、過去、現在および未来が相互に関連しあいながら立ち現れる現象であることを示した。また後者の対立に対しては、現在の行為としての想起や予期にデータを求めながら、なお且つ、体験の事実に接近していく実証研究について言及した。

このように今この瞬間における行為という視点から過去と未来を見ていくことにより、これまで心理学において研究対象とされることの少なかった「体験としての時間」を扱う

ことが可能になった。更に、こうした研究から従来あった過去と未来、因果と行為という2種類の対立を乗り越える実り豊かな研究成果が期待できることが示唆された。

各章の概要は、以下の通りである。

序 章

序章では、因果と行為あるいは通時と共時という視点から、心理学的な時間について考察した。とりわけ、過去や未来を時間の流れというアナロジーから理解しようとする思考から脱却することを目指した。更に、心理学的な意味での時間を、現在の行為として捉え直した。そして、時間に関わる主体の体験としての想起行為および予期行為について考察することの意味について検討した。

第1節 因果と行為

心理学における過去や未来に関する研究の多くは、(円環を含む)時間軸の存在を前提に行われてきた。すなわち、過去を扱う研究では、記憶は記銘－保持－再生(再認)という時間軸上で考えられてきた。一方、未来を扱う研究では、動機づけは動機－保持－(行為の)遂行という時間軸上で考えられてきた。これに対し、時空間に定位される人間にとって、知覚されるのは現在であり、一方、過去と未来は知覚されるものではなく、その存在は「想起する」ないしは「予期する」という行為そのものにあると考える見方もある。つまり、想起や予期という行為が過去や未来の立ち現れであると考えられる立場である。この立場では、体験としての過去や未来という視点から、心理学的な時間現象は説明される。本論文では、前者を通時的視点、後者を共時的視点と呼ぶこととする。これら2つの視点は、同一の現象をそれぞれ異なった視点から見ていると言うこともできる。しかし、2つの視

点を同時に満たすことは容易ではない。また言い換えれば、通時的視点をとるとは、時間を因果的に捉えることであり、一方、共時的視点をとるとは、時間を行為として捉えることである。

第2節 本論文の構成

本節では、以下の各章の目的と概要を中心に本論文の構成について記した。

第1部 想起

第1部は、2つの章からなる。第1章では、伝統的な心理学が用いてきた因果的過去研究の特徴とその問題点について言及し、それに代わり得る時間の捉え方として、「想起する」という概念を提案した。次に第2章では、そうした想起行為がいかなる構造をもっているかを地震前兆現象の想起を例に考察した。続いて、そうした想起行為が、いかなる機能をもっているかについて考えた。

第1章 過去と想起の関係

本章では、過去を共時的視点から捉えることの意義について明らかにした。ここではまず、具体的実証研究を例に、通時的視点の抱える問題について考察した。次に、共時的視点をとった研究を具体的に取り上げ、想起研究の特徴とその意義について検討した。

第1節 因果的過去研究パラダイム

ここでは、従来心理学行ってきた記憶研究に焦点をあて、そこで扱われてきた時間について考察した。確かに、記憶研究に時間という視点を取り入れた場合、過去を中心にした記憶研究、現在を中心にした記憶研究、および未来を中心にした記憶研究という3つの研究が考えられる。しかしながら、具体的研究を例に考察を進めたところ、これらの研究は

いずれも、時間を単に、過去・現在・未来に分け、その重点をどこに置くかを持って、記憶の時間モデルを立てていたに過ぎないことが明らかになった。そこで、視点を変え、時間表象の形態という点から記憶の時間モデルについて考えた。その結果、存在時間と意識時間という2つの表象形態を見いだすことができた。なお、過去の出来事が現在に至るまで貯蔵されているという記憶貯蔵モデルは、前者の存在時間を前提としていた。

第2節 原因としての過去

本節では、存在時間における記憶、すなわち、記憶貯蔵モデルに基づく典型的研究について検討した。具体的には、実験室的研究全般、記憶実験研究、発達心理学における研究、時間知覚・時間評価研究といった分野における具体的研究を例にそこで流通している時間について考察した。考察の結果、過去の出来事を因果の原因と考える研究は、いまだ心理学において主流をなしていることが明らかとなった。自然科学の研究パラダイムを導入しようとした際に無反省に用いられてきた状況は理解できるが、心理学の基本姿勢を考えた場合、そこには大きな問題が潜んでいた。

第3節 想起としての過去

本節では、意識時間に関する心理学の可能性について考察した。特にここでは、共時的視点に立った場合の過去について考察した。共時的視点に立つと、今ここにおける思い出すという行為が過去そのものとなる。具体的には、Middleton によるローソン蔵相証言の研究を例に、オリジナルの記憶に固執することなく、証言者間の発言の相違に着目し、想起現象を対人関係の問題として扱う研究について考察した。考察の結果、想起という行為は、人間の意識的行為に他ならず、そこでは他者との関係の中で行為が意味づけられている

くことが明らかとなった。したがって、こうしたやり取りの場に注目することにより、想起という行為の意味が明らかにされていくのである。

第2章 想起の構造と機能

本章では、心理学的な過去を想起行為として捉えた場合に展開される研究について考察した。特に、想起の構造と機能という視点から検討した。想起の構造については、阪神淡路大震災の際に収集された地震前兆現象報告を中心に、想起の構造がどのような形で構成されているかについて考察した。一方、想起の機能に関しては、これまで得られた知見をもとに、想起の主要な3つの機能について検討した。

第1節 想起の構造

本節では、地震の前兆現象について思い出し、それを報告するという具体的な想起行為を例に、想起の構造について考察した。地震の前兆現象を体験したということを他者に報告するというコミュニケーション行動においては、そうした体験の信用性や真実性が高いことが暗黙のうちに望まれている。ここでは、想起内容の信用性や真実性が何によって支えられているかといった問題について検討した。考察から、前兆現象を想起するという行為は、テープレコーダやビデオデッキで例えられるような想起者単独の正確な再生行動ではなく、むしろ、想起時点における聞き手の存在なくして、成立しえない現象であることが明らかとなった。そうした意味において、前兆現象の想起という行為は、共時的に見た時、はじめてその意味が明らかにされていく。

第2節 想起の機能

想起行為の意味を明らかにするとは、今ここでの想起という行為が持つ、他者を含めた

想起状況に対する機能を明らかにすることにある。そうした機能という視点から分類するならば、想起は、行為のための想起、アイデンティティとしての想起、共同体の存在を支える想起という大きく3つの想起に分けることができた。

第2部 予 期

第1部では、過去の時間としての想起について考察してきたが、第2部では、未来の時間としての予期について考察した。過去と未来とは、因果的・体験的に全く異質なものとして捉えがちであるが、想起する、予期するという今ここでの行為として捉えた時、そこにはむしろ、共通した在り方が浮かび上がってくる。

第3章 未来と予期の関係

本章では、未来を共時的視点から見ることの意義について明らかにした。ここではまず、プランと行為の関係をもとに、通時的視点に内包する問題について考察した。その後、通時的な視点と共時的な視点を明確に分けることが大切な理由について考えた。

第1節 因果論的視点に立った従来未来研究

あることを意図し、計画を立て、それをある時間が経過した後に実行することにより、意図的行動は遂行される。ただし、この考えでは、意図や計画を頭の中に貯えておき、必要な時にそれを取り出し実行する、因果としての記憶と類似したメカニズムが前提とされている。つまり、記憶研究同様、動機づけ研究といった未来と関連した心理学研究も、因果的研究パラダイムに則っているのである。

第2節 因果的未来研究パラダイムに内包する問題

従来研究においては、未来は、動機の遂行、すなわち、意図の結果として存在してい

た。これは、心理学的な未来を研究する際にも、自然科学の研究方法が無反省に用いられてきたことを示している。しかしながら、こうした因果関係に基づいた未来研究は、心理学にとって重要な、未来の大切な側面を無視することになった。

第3節 予期としての未来

心理学的に未来を捉えるときに、未来を因果関係という側面からのみ捉えていくことには限界があることが明らかとなった。因果関係の中で未来を捉えるとは、存在時間として未来を見ていることになる。そこで、過去と同様、もう1つの時間である意識時間として未来を捉えたところ、心理学の立場から未来について調べるためには、予期が生成される場において、どのように予期が生み出されていくか詳しく検討していく必要があることが明らかとなった。

第4章 予期の構造と機能

本章では、未来の機能（意味）とその構造を明らかにした。未来の意味を知るとは、必ずしも原因とその結果を明らかにすることではない。残念なことに、未来の意味の世界については、想起研究以上に、その研究が遅れている。

第1節 行為と世界の関係について

Uexkull の機能環の考えを基に行為と世界の関係について考察した。機能環の考えは、知覚と行為の関係について述べていたが、ここでは、その考えを未来の予期の問題へと展開した。

第2節 予期の構造

予期を因果関係ではなく、今ここにおける生成の行為として見た場合、予期という行為

自体がどういった構造をなしているか、その特徴を明らかにすることが重要となる。そこで、動機づけを構成するゴールの構造について検討した。特に、近年のゴール研究の特徴を踏まえ、1) ゴールのカテゴリー(内容分析)、2) ゴールの階層構造(階層構造分析)、3) ゴールの時間軸、4) ゴール属性の評定(アセスメント)という4つのゴール分析に焦点をあて検討を加えていった。そして次にそうした検討結果を基に、青年が抱く将来に対する展望に関する具体的研究について検討した。その結果、青年が抱く将来展望は、大きく2つの相に分かれ、中年期までの何かを得ることにより変化していく相と中年期以降の何かを失うことにより変化していく相とに分けられることが明らかとなった。

第3節 予期の機能

予期行為の意味を明らかにするとは、今ここでの予期という行為が持つ、他者を含めた状況に対する機能を明らかにすることである。予期とは、能率的に事を進める際に役立つことは確かであるが、他にも、今ここでの自分の存在を支える機能や他者との人間関係を支える機能をもつことに目を向ける必要がある。ここでは、予期の機能として、行為のための予期、アイデンティティとしての予期、共同体の存在を支える予期という3つの機能について考察した。

第3部 二項対立を超えて

第3部は、次の2章から構成されていた。第5章では、想起と予期を総合的に捉え、想起研究と予期研究の関係について明らかにした。また第6章では、コミュニケーションの場における想起に関する実証研究を紹介した。

第5章 想起と予期、および因果と意味の二項対立を超えて

本章では、想起と予期の類似点と相違点について明らかにし、そこから、想起と予期のセットという概念について考察した。また、真偽と正誤の違いについても検討した。更に、因果と意味の二項対立を超える道についても考察した。

第1節 想起と予期の関係

通時的視点をとった場合、過去は現在の原因であり、一方、未来は現在の結果である。このように、通時的・因果的に捉えた場合、両者に大きな違いが見られた。しかしながら、共時的視点を取り、過去や未来を今ここでの行為として捉えたとき、そこにはむしろ両者の関連性が顕在化してくる。例えば、想起と予期という行為は、その機能において類似していた。前述してきたように、両者とも、行為の遂行、アイデンティティの確立、共同体の存在維持といった機能を果たしていた。これはまた、発話行為それ自体が命令や指示といった機能を果たすことと関連していた。すなわち、想起や予期という行為の多くは、言語行為であり、まさにそうした意味において、想起や予期それ自体が意味をもった行為となる。更に、想起と予期は、個別に理解すべきものでなく、むしろ、セットとして捉えるべきものであり、想起と予期のセットが、「現在」の在り方とバランスをとって存在している。

第2節 出来事の正誤問題

過去や未来に必ず原体験が存在するという考え方は、常に正確な事実をどこかに求める人間の欲求から生じているに過ぎない。原体験を発見することにより、物事の真実が明らかにされるといふ錯覚に陥ることがあるが、それは必ずしも真実ではない。原体験の問題を、想起や予期を行う行為主体にとっての、過去や未来と現在との関係性の問題として捉

えるならば、客観的な真偽判断の重要性は減ずることになり、想起体験も予期体験も、行為する主体にとっては常に真なる体験である。また、行為する主体が存在しなければ、意識的な体験は存在しえない。このように想起行為と予期行為を土台に過去や未来の在り方を考えた時、過去や未来は、確固として安定した存在ではなくなる。しかしながら、心理学的に時間の問題を考えるには、この不安定な過去と未来を基点に理論や実践を組み立てていく必要がある。なぜなら、今ここにおける人間の意識や行為を出発点とするところに、心理学がこころの科学として存在する意味があるからである。

第3節 通時と共時の概念再考

James(1890)の意識の流れの概念、及び、Saussure(1949)の通時・共時概念を再考することを通じて、もう一度、時間の概念について考え直した。Jamesの意識の流れを因果的な時間の流れではなく、発達の行為の流れとして捉え直した時、意識の流れは極めて重要な概念となる。この視点に立つと、Saussureの通時・共時の概念が新たな見えをもつことになる。すなわち、通時的な時間とは、共時的な時間が生成・解体していく多種多様な運動・流動としての時間を指すことになる。また、こうした発達の・通時的時間は、共時態を前提としていることから、関係性の中で現象を捉えることが必要となる。

第6章 因果と意味の対立を超えて

前章では、過去と未来、および因果と意味の二項対立の問題について検討した。本章では、二項対立を超える具体的な実証研究として、法廷における供述の分析をもとに、共同想起における想起スキーマの問題について考察した。そして更に、同じく法廷供述をもとに、想起コミュニケーションを分析する際の分析単位の問題について考察した。

第1節 共同想起研究 —Drew(1990)—

法廷場面における実証研究として、まず、Drewによる共同想起研究を紹介する。彼は、公判記録から採ったデータを用い、証人尋問における過去の出来事の実定性構築のプロセスについて分析を行った。

第2節 共同想起における想起スキーマ —甲山事件—

想起するという行為の多くは、独白ではなく、他者との対話の中で展開される。本節では、実際に法廷内でなされた目撃証言のやり取りについて検討した。こうした想起研究は共時態と共時態の狭間に現れる通時態としての流れる時間の特徴を明らかにすることで、想起の実定性の問題を浮かび上がらせることになり、そのことにより、静的な共時現象を捉えるだけでは見えてこなかった興味深い、極めて心理学的な現象を扱うことができるようになる。ここでは、具体的供述の分析を通し、尋問コミュニケーションにおいて供述が生成されていく供述生成スキーマを明らかにした。

第3節 分析単位のゲシュタルト変換 —尼崎スナック狙撃事件—

本節では、前節に引き続き、法廷における尋問者と被尋問者のコミュニケーションの分析を行った。コミュニケーションの分析においては、変化しつつも反復されるコミュニケーションのパターンとそこに働く動的なシステムの発見が目指されるが、その過程では、それまでの固定したものの見方の変換が求められる場合がある。ここでは、「問い—答え」の連鎖から「答え—問い」の連鎖へとその分析単位を変換することにより、連鎖の見えが大きく変化した。

終 章

想起すると予期するという行為として過去と未来を見た場合、そこには原体験という確固とした基盤が存在せず、人間存在の基盤を脅かすという問題がつきまとっていた。意識としての時間研究には、世界を相対化し、幻想としての世界に私たちを放り出してしまいう虞がある。また、因果関係を追及できず、現象の記述に終始することになる。終章では、こうした問題を孕んだ意識としての意味時間と従来自然科学の基盤をなしてきた因果的時間との対立を克服する道について検討した。検討の結果、因果と意味とが現在における行為の中で同時的に構築される状況を時系列的に追うことで、新たな研究が創出される可能性が示された。生成の現場こそが、因果と意味の対立を越え得る場となりうるのである。

第1節 因果と意味について

本節では、因果と意味という概念が対立するものではなく、むしろ、因果と行為とは、今ここにおいて同時的に構築されるものであり、その構築する姿を時系列的に描写することにより、新たな心理学研究が生み出される可能性について検討した。従来の因果的研究には、研究者が研究対象とされる主体から遠ざかってしまう、原体験が前提とされない心理的現象を原理的に扱えない、決定論に陥りがちであり、人間の自由、意志といった問題も過去の事実還元してしまうといった限界があった。一方、意味的研究にも、意味を読みとる研究者の主観や直観に研究が依存しており、客観性・科学性に欠ける、行動・行為の記述に終始し、行動・行為の予測・統制へと発展しない、行動・行為の意味は、個人にとどまることなく、広く環境・他者・社会に広がっていき、位置研究者には扱いきれなくなってしまうといった限界があった。そうした方法的な対立を超える方法として、現在における体験や行為を、その場における行為の流れ・行為系列として捉えることにより、因

果的時間系列の中で行為の意味を捉える方法を提案した。また、科学性を担保する方法についても検討した。

第2節 これからの研究の展望

前節に示した研究は、ある特定の状態における主体の行為を丁寧に追うことにより、環境や身体を込みにした現象の記述が可能となる。こうした研究の記述は、生身の人間が生きる意味を明らかにしていくことになり、また、因果と意味、過去と未来の対立を克服する方法として期待しうることが明らかとなった。同時に、こうした研究は、「全体」と「環境」、「もの」と「こころ」の対立といった問題をも超えていく。対立の一方に問題を選べることなく、両者のコミュニケーション、やりとりそのものを研究対象としていくところが、心的現象、意識の心理学へと接近していく道となる。